

子どもの人間関係を育む教師の支援
—構成的グループエンカウンターを中心に—

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
126033 岡田奈緒

子どもの人間関係を育む教師の支援 —構成的グループエンカウンターを中心に—

岡田奈緒

生徒指導力高度化コース

要約：人は集団に所属し、生きている。生まれてからは家族と、学校に通うようになってからはそこに関わる者たちと、社会に出てからは更に、人間関係は広がっていく。人が生きていく上で人間関係は避けては通ることができないものである。そして、今回教職専門実習を通してその人間関係の在り方や基礎を、学校またその学級の中で子どもたちが学ぶ支援ができると考えた。そして、その手段の一つとして、構成的グループエンカウンターを取り挙げ、本研究を行った。研究方法としては、文献調査を基に、現在の日本での人間関係の現状や問題、人間関係とはどのようなものかを明らかにしていった。そして、人間関係を学ぶことをねらいとする構成的グループエンカウンターと照らし合わせ、その有用性を事例を基に検証していった。その結果、そのエクササイズや振り返りの中で子どもの人間関係ができていくことがわかった。

キーワード：人間関係 構成的グループエンカウンター 人間成長 変容 直接体験

1. はじめに

学校の中で、子どもが集団に所属し生活していくことには、様々な意図や意味がある。効果的な授業運営や教師との人間関係づくりなどその理由は多々あるが、その中でも子どもが集団の一員として、人間関係をつくる能力は彼らが社会に出ていく際に最も力になるものであると考える。学級集団の中で、子どもはその集団の一員として周りの人間との関係をつくっていく。集団に所属するということは、子どもが人間関係の在り方、つくり方を学んでいくということでもある。しかし、最初からそれが完璧にできる人間はいないだろう。他者とぶつかり、困惑し、問題を解決しながら人は周りの人間との関係を築いていく。中には、己の力のみではそれが困難な子どもの存在もあるだろう。教職専門実習では、4月の新たな学級が始まる際に、教師が主体となり学級の雰囲気を和ませたり、学級やグループで子ども達が打ち解け合えるような取り組みを行ったりする場面を目にした。このように、教師は子どもが人間関係をつくることのできるような支援を行っていく必要があ

る。その支援の在り方の一つの手段として、構成的グループエンカウンターが有効であると考えた。本稿では、これを活用して子どもの人間関係づくりの支援を考えていく。

2. 人間関係の在り方

2.1 人間関係の必要性

現代の日本では、いじめ、不登校、学級崩壊、自殺、暴力行為など、子どもを取り巻く現実に様々な問題がある。文部科学省は、学校内や学校外における暴力行為の発生状況、いじめの発生学校数・発生件数、また不登校児童生徒数などについて、全国都道府県及び市町村教育委員会を通して生徒指導上の諸問題に関する調査を行っている。これらの調査の数字は、かなり高いものになっており、その一因として考えられるのが人間関係の問題である。2008年3月に改訂された中学校学習指導要領では、特別活動の目標に「人間関係」という文言が加えられ、子どもたちの社会性の育成やよりよい人間関係づくりが一層重視されてきている。采女（2008）は人間関係づくりの授業を取り入れた成果として、その学校において、問題行動発生件数、不登校生徒数、欠席率推移が減少したというデータを出している。つまり、人間関係が向上することにより、現代の子どもが抱えている問題を軽減することができると言える。

近年ではテレビゲームや携帯電話の普及により、子どもが対面での人間関係を持つ機会が減少している。それに伴い、子どもが生身の人間関係の中で身につけるべき技能が失われている。核家族化や少子化が進み、家庭内に兄弟がいない子どもが増え、地域のつながりも弱くなり、地域の中で子どもを育てるという機会も少なくなっている。そのため、子どもが多様な人間関係を構築するための機会が減少している。この現代人の人間関係の持ち方の特徴を、石田（2005）は直接関係行動の減少、間接関係行動や関係排斥行動の増加として指摘している。また、総務庁の実施している世界青年意識調査からは、日本の青年期の対人行動の特徴として、積極的に関係をつくったり葛藤を処理したりする人間関係の弱さがうかがえる。今の日本では、ナマの人間関係が薄れつつあるのである。バーチャルな世界で生きる今の子どもたちに、学校教育現場において、直接体験を通して人間関係を養う必要がある。

2.2 人間関係とは

では、その人間関係とはどのようなものなのか。そもそも私たちは、人間関係というも

のをどのように捉えているのだろうか。近年では大人の間でも「人間関係が大切だ」「人間関係がうまくいかない」という言葉が飛び交い、それについて数多くの本が出版されている。私たちが人間関係という言葉を使う際、その多くはまず人との親和性を伴った関係を思い浮かべるだろう。他人と他人とが出会い、そこに会話や行動が生まれる。その中で人との円滑な関係を築くことを、私たちはまずは人間関係と捉える。

しかし津村（2008）は、人間関係をそれを越える人間の成長を伴った関係としている。津村によれば、人間関係は人との関わり合いが始まり、出会いが起こるその瞬間に私が生まれるものであると言うのである。相手と出会い関係が生まれた時、相手との関係の中で自分はどのような人間なのかといった問いが発せられる。そして、関係が続いていく過程を通して、相手との関係の中で様々な自己を形成していく。つまり、人間関係とは、私が生まれ育つ場である。性格や自己概念、価値観などは他者と関わることで形成されていく。どのような人と出会い、どのような関わり方を体験するかで、私の育つ可能性が広がるのである。

一方、人間関係は相互関係であり、そこには必ず他者が存在する。そしてもちろん、その他者もまた私という存在と出会い、関わっている。つまり、私が生まれ育つと同時に、相手も誕生し、育っているのである。人間関係は、人を誕生させ人を育てる場である。これはまさに教育の場であり、人間が人間として成長していくためになくてはならない場である。人と関わり、一貫した共通の自分の関わり方とともに、他者との関係の中で変化する自分自身を捉えることが、人間関係の中で重視することである。他者に応じて自己やその関わり方を変えることは、見せかけの自己行動ではない。より適応的な自己の行動の表れとして理解することが、自己を肯定的に捉え人間関係をつくっていくために重要である。

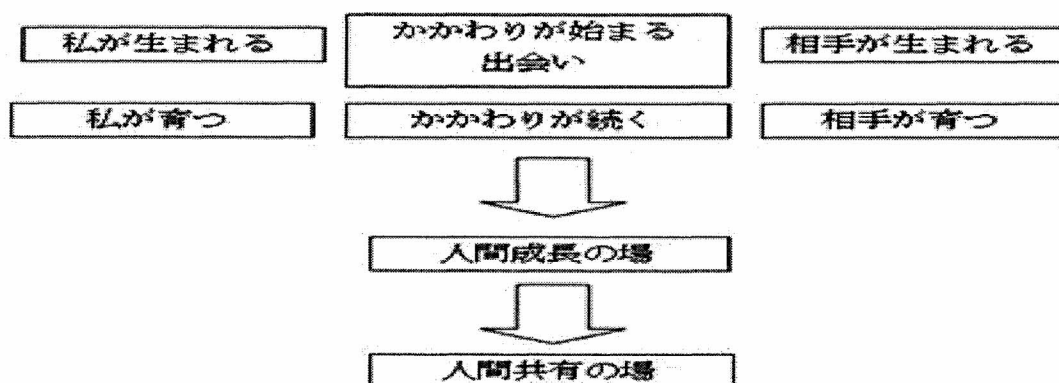


図1 人間関係とは

津村俊充他編『スクールカウンセリングと発達支援』より抜粋

3. 構成的グループエンカウンター (Structured Group Encounter) とは

3.1 日本への導入

構成的グループエンカウンター (以下 SGE) は日本で生まれたものではない。その源流は、アメリカのエスリン研究所にある。我が国での SGE の先駆者は、國分である。彼は、1973 年～4 年にかけて渡米し、そこで SGE を学んだ。日本に帰国後、カウンセリング協会や自身の勤務先である大学で SGE を行い、その有用性が認められ、SGE は日本で広まっていった。國分は SGE の全体像をまとめ、その指針を作るなどして積極的に SGE を普及させていった。現職教員や教育大学大学院生も教育現場での効果を検証するなどして、その研究も進められていった。その後、SGE は急速に日本に普及し 2006 年の時点では全国のエducational委員会の 9 割近くで教員研修のプログラムにも取り入れられた。現在の学校教育の中でもカウンセリングの手法として注目されている。

3.2 構成的グループエンカウターの目的と方法

SGE は、本音と本音の触れ合いによる人間関係を、グループ活動を通して体験する方法である。國分 (1992) は「SGE とは、パーソナル・リレーション (感情交流) を主軸にし、これに若干のソーシャル・リレーション (役割関係) を加味したグループ体験の場を提供し、その体験を通して各メンバーの人間成長を援助する方法である」と述べている。ここでの人間成長は、自己発見を意味する。具体的に示すならば、①思考、②感情、③行動の三領域のいずれかが拡大するか修正されることを意味する。例えば、男性が妻の役割を演じる (家族劇のエクササイズ) うちに、妻の苦勞がわかってきた場合、これは妻に対する認知 (思考) の修正であり、認知が修正されると妻へのいたわりの感情が生じてくる。いたわりの感情が生じることにより、意識して妻を手伝うようになる (行動の変容)。このような、今までとは違う自分がそこに出現した場合、それが自己発見である。

では、どのようにその自己発見、人間成長を援助するのか。それはエクササイズによる。エクササイズとは、メンバーの「思考」「感情」「行動」にゆさぶりをかける課題である。

「あなたはどんなときに、誰から、どんなことをしてもらいましたか」と繰り返し問うエクササイズでは、他人の情やありがたさの感情を湧きおこす。また自己を語り合うエクササイズでは、お互いに自分の行動の仕方を修正するきっかけになる。対照語から自分の好きな何れか一つを選び理由を語るエクササイズでは、多様な価値観・思考にふれて自分の生き方を再吟味するきっかけになる。そしてこのような課題でゆさぶりをかけられた後、

シェアリングをすることが最も大事なことである。エクササイズを通して、感じたこと、学んだこと、疑問に思ったことをお互いに語り合うシェアリングを行う。これにより、思考・感情・行動の拡大・修正が促進されるのである。

4. 構成的グループエンカウンターを生かした人間関係づくり—実践事例から

人間関係の中で重視されることは、他者との関係の中で自分自身に変化することである。そして、今の日本で求められていることは直接体験を通しての人間関係をつくることである。つまり、他者との直接体験を通して自己の変容が認められれば、それは人間関係がつくられたと言える。そして、SGE ではエクササイズ、シェアリング等の直接他者と関わる経験を通して自己発見や人間成長、言いかえれば自己の変容を促すことを目的としている。SGE は、他者との直接体験を通して自己の変容を促す、人間関係をつくる手段として適していると言えるだろう。

では、実際に行われた SGE の実践事例を挙げて、子どもが人間関係を学ぶあるいはつくることができたかを検証していく。他者との直接体験を通して、考えや行動の変容が認められたかという観点から見ていく。

4.1 実践事例①中学校 1 年生の教室から

まずは、中学校 1 年生での実践を挙げる。

(1) 実践の目的

道徳の時間は、自分自身を振り返り自分の生き方を考える時間である。しかし時として、生徒にとって実体験のないものや、想像を超える状況を資料として扱うこともある。そのような場合、その場でただ考えたことを発表するだけでは、本当の自分はなかなか見えてこない。頭で考えたことと、実際にその場に立った時の気持ちや考えに違いが出てくるのは多々起こり得ることである。そこで、「自分を見つめる」ために、そして生徒が具体的に自分のこととして考えられるように、体験を通した道徳の授業を実践することが、今回の目的である。

(2) 実践内容

まずは、互いの立場や気持ちを尊重し、相手の身になって考え、あたたかく接しようという思いやりの心を育てることをねらいとして、ブラインドウォークを実践した。ペアに

分かれ、片方が目隠しをし、もう片方が目隠しをしている人を案内しながら校舎の中を歩くというエクササイズである。毎日歩いている校舎の中でも、目隠しをしたとたんに全く前に進むことができない子どももいた。廊下や曲がり角、階段などを越え、目的地まで無事到着したら、ペアで振り返りを行った。その中には、「相手の様子を見ながら進んだつもりだけど、怖かったと言われてしまって相手のことを考えるのは難しいと思った」「怖くて手を無理やり放してしまって相手に悪かったと思う。せっかく心配してくれたのにごめん」「怖かったけど、一生懸命に考えてくれている気持ちがすごくわかった」という声が上がった。

次の道徳の時間には、一枚の絵と資料を用いた。資料は以下のものである。なお、この授業はブラインドウォークを実施したA学級と実施していないB学級の両方で行った。

場面は電車の中、周りの座席はいくつか空いているにも関わらず、白いつえを持った女の人が手すりにつかまって入口に立っている。彼女に近づき、「席が空いています。座りませんか。」と話しかけても、「結構です。」との言葉が返ってくる。

この資料を読んだ上で、生徒に「なぜ女の人が断ったのだろう」という発問をし、理由を想像させた。すると、以下に分類される意見が出た。

- ①迷惑をかけたくないから。
- ②次の駅で降りるのでめんどうだから。
- ③ここまで一人で来ることができたので、人を頼らずに一人で頑張れるから。
- ④違う場所に行くと方向が分からなくなってしまうから。
- ⑤車両の奥に入ると降りるまでに時間がかかりドアがしまってしまうから。

A学級では④と⑤のような内容の意見が多く出た。B学級では①～③の意見が中心であった。更に、「女の人にとって、どうしてあげることが一番いいのだろう」という発問では、以下に分類される意見が出た。

- ①どうすればわからないのだから、声をかけないほうがいい。
- ②特別扱いしないで、そっとしておくほうが親切だと思う。
- ③近くで見守り、危なそうなとき手助けに行く。
- ④声をかけて降りるときに手伝うことを伝えて、席に座らせる。
- ⑤何か手伝えることがないか聞いて、頼まれたことをする。

A学級では④や⑤などのような意見が多く出た。B学級では①や②のような意見が多く、

④や⑤のような意見は少数であった。

また、この授業の後の振り返りでは、「自分がいいと思った事でも、相手にもいいとは限らないのだと思った」「相手のことは想像だけでなく、相手に聞くことも大切だと思った」「見えないことはすごくつらいことだと思った。そんな人に会ったら、何か手伝いたい」との声が上がった。

4.2 実践事例②小学校5年生の教室から

次に、小学校5年生での実践を挙げる。

(1) 実践の目的

この実践は、5年生の一年間を通じてSGEを用いて子どもの人間関係能力の育成を、ふれあいのある学級集団の育成を目指したものである。この学校の5学年では近年、私立中学校を受験する児童が学級の3割程度を占めていた。彼らは学級の中でもリーダーシップをとれる児童であった。しかし、6学年の二学期半ばから急速に学級の活動に消極的になるという状態が続いていた。それに伴い、学級の人間関係も不安定な状態になりがちであった。これを踏まえ、ここでは人間関係能力を系統だったプログラムで、構成的グループエンカウンターを実践した。

学級の人数は、男子20人、女子16人の計36人の学級である。4月に新学級に編成されたばかりの学級である。4月当初の学級の実態としては、4年時の同じ学級の友人関係を中心に2〜3人で固まっている状態であった。また、孤立児童や周辺児童が14人いた。4年次より乱暴でボス的な男子がおり、子分的な児童を従え、絶えず他の児童とトラブルを起こしていた。弱い児童や女子をいじめ、新学級でもボスを気取ろうとしていた。

(2) 実践内容

まず、4・5月には児童相互のリレーション形成のきっかけを作るため、ゲーム的要素が強く、体を動かすエクササイズを繰り返し行った（団結くずし、なんでもバスケット、サイコロトークング、他己紹介ゲーム等）。6・7月には、児童相互のリレーション育成を目的としたエクササイズを実施した（4・5月のエクササイズに加え、いいところ探し、グループ作りゲーム、10年後の私、ブラインドウォーク等）。この実践の中では、ルールをしっかり理解させ、暴力的な児童のルール違反を許さないように行った。ゲーム的要素の強いエクササイズには、児童は喜んで参加していた。また特定の児童への身体接触、暴力的な児童との関わりを嫌っていた児童が数名いたが、徐々に見られなくなった。4〜7月の実践

を経た学級集団では、児童の交流が学級編成変え前の4年時の児童同士の交流から、学級全体へと大きく拡大した。それとともに、暴力的な児童が特別な存在ではなくなった。男女を含めて児童相互のリレーションが育成されてきた。

二学期は、児童の個々が学級の中でそれぞれに受容されるような他者受容の効果を狙ったエクササイズを展開していった。水泳大会、運動会、学芸会等大きな学校行事が続いたため、その振り返りにSGEを用いた。三学期には、児童が学級集団の所属感を一層強めることのできるようなエクササイズを実施した。これは、学校行事とSGEを絡めたものである。なわとび月間や持久走への全校での取り組みを利用したものである。それとともに、児童個々が自己理解と自己意識を持てるようなエクササイズを実施した。

また、SGEを実施したこのC学級と実施しなかったD学級で、ソシオメトリック・テストを行った。ソシオメトリック・テストとは、集団の成員に一定の条件下で選択・排斥の感情を抱くほかの成員を指名させることにより、集団における選択・排斥・孤立といった成員間の関係や、集団の構造をとらえようとするものである。図2がその結果のグラフとなる。このグラフでは、C学級とD学級のそれぞれにおいて、孤立児童またその周辺児童が何月の時点で何パーセントであったかを示している。

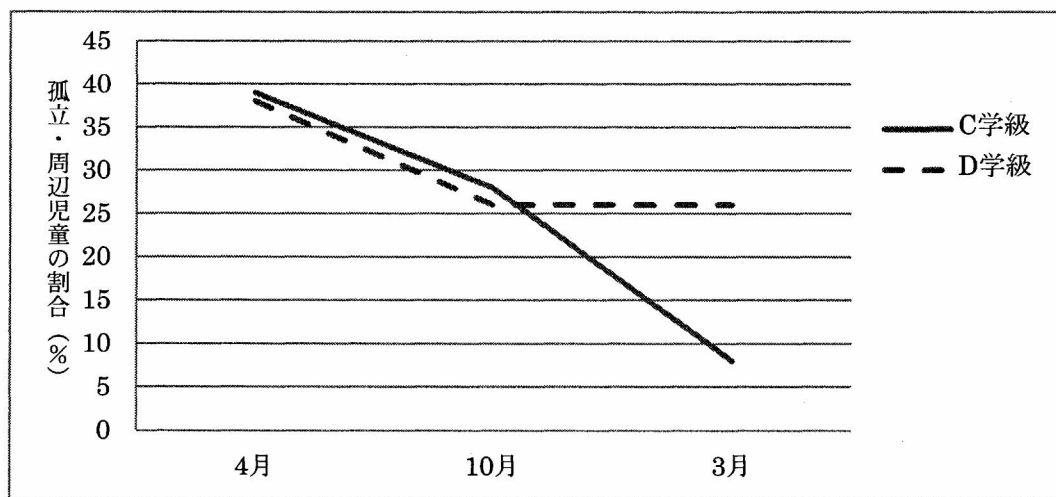


図2 ソシオメトリック・テスト結果

國分康孝編『エンカウンターで学級が変わる 小学校編』より抜粋

4.3 事例分析

(1) 実践事例①中学校1年生の教室から

では、先に挙げた二つの事例を分析していく。まず、①の実践である。前者のブラインドウォークのエクササイズは、他者に身を任せることの難しさを学ぶものである。それと

同時に、他者に対するいたわりや優しさを身に付けさせ、信頼関係を培うエクササイズである。このエクササイズを行った生徒の振り返りからは、「相手の様子を見ながら進んだにも関わらず、それがうまくいかなかった」「相手に悪かった」「自分のことを考えてくれていることが伝わった」など、相手意識を伴った感想が出た。相手の立場に立って、相手の気持ちを想像して行動する生徒の様子が見られた。しかし、誰もが「思い通りになった」との感想は持たなかった。相手の立場になって考えたつもりでも、自分と他人は違う人間であり、同じ考えを持つことは困難である。結果、相手の気持ちや考えは自らの想像とは異なるものとなった。彼らはこのエクササイズで、そのことを理解できた。自分の考えとは異なる思いを他人が持っていることを認識し、それを受容することができた。

また資料を用いた道德の授業では、ブラインドウォークを実施した A 学級と実施しなかった B 学級を比較することで大きな違いが見られた。「見えない」ということを自分で経験したかどうかは、彼らの考える視点に大きな違いを与えた。一つ目の発問に対する答えを A 学級と B 学級とで比較すると、A 学級の方が相手の立場に立った考えが多く出ていた。二つ目の発問では、A 学級の方が積極的に相手に関わる内容の意見が多く出ていた。

このブラインドウォークと道德の授業を通して、彼らは独りよがりの自らの想像だけでなく、相手が本当に望んでいるものを考えることができるようになった。また、相手の気持ちを想像する際には、自らの狭い思考に囚われることなく、様々な可能性を考え広い視野を持って相手の気持ちを想像することが可能となった。エクササイズで人と直接関わることにより、そしてその振り返りを行うことにより、自らの思考の幅を広げることのできたこの実践は、生徒の人間成長の場と言える。まさに人間関係の場である。

(2) 実践事例②小学校 5 年生の教室から

次に、②の実践を見ていく。この実践で大きく変容したのは、まず暴力的な児童である。4 月の当初は絶えず他の児童とトラブルを起こしていたこの児童が、一学期の終わりにはその存在が学級の中で特別なものでなくなっていた。この暴力的な児童とのかかわりを嫌っていた数名の児童も、徐々に見られなくなった。これは、この暴力的な児童が SGE のエクササイズを通して変化していったためであろう。この学級では、4・5 月には体を動かすなどゲーム性の強いエクササイズを用い、子ども同士の親和性を高めていった。そして 6・7 月では、①の実践でのブラインドウォークやいいところ探しなど、他者を肯定的に受け入れて信頼関係を築くエクササイズを中心に行った。事例①で出てきたブラインドウォークについてはもちろん、そのほか他者を肯定的に受け入れるエクササイズを続けることで、

他者に対して攻撃的だった児童がほかの児童からも奇異の目で見られることなく、その存在を学級に受け入れられるように変容していく様は、まさに人間関係がつくられていると言えよう。

また、この実践の中には人間関係の幅の広がりも見られる。図2のソシオメトリック・テストの結果から、SGEの実践を行ったC学級と行っていないD学級を比較すると、D学級では児童の人間関係の活性化が少なかったことがわかる。D学級では二学期半ばを境に人間関係は一向に広がらなくなった。また一年間を通して、4月当初の児童の集団内地位が三学期末になってもあまり変化しなかった。一方、C学級では一年間を通して人間関係の幅は広がり続けている。つまりSGEの実践は、通常の学校生活では交友関係を築きにくい児童達に、そのきっかけを与える効果があると考えられる。

5. 考察

実践事例から、SGEを行った学級では子どもがそのエクササイズや振り返りを通して、人間関係をつくる、学ぶことができていた。つまり、SGEは学校教育の中で子どもが人間関係をつくるに適している手段だと言える。

しかし、SGEを授業に取り入れる際には注意すべき点も多々ある。まずは、実践事例①と②に共通していたように、ねらいを立て計画的にエクササイズを実行していくことである。エクササイズは、そのねらいに応じて6つの種類に分類される。子どもの実態を捉え、理想的な子どもたちの姿を思い浮かべながら、まず目の前の子どもたちに必要なエクササイズを選んでいく。最終的なねらいに応じて、子どもがその姿に近づくことができるよう計画的に進めていくことが、SGEにおいて効果的であるようだ。また、集団形成の前段階と後段階とでは、もちろんエクササイズの内容は変化していく。それは、学級の様子を見ながら、教師が徐々に変化させる必要がある。その際には、子どもたちの発達段階を考慮し、彼らの抵抗を考えながら、身体接触や内面探索の度合いを決めていくことが、教師に求められる。また、道徳や学級活動などの時間では、教科の目標と相まってSGEは取り入れやすい。しかし、それ以外の教科の学習の中には、どのような形で取り入れるかについては、まだまだ検討の必要がある。

そして、実施する中で重要なことは、ルールを徹底させることである。エクササイズの中には、ゲーム要素の強いものも多い。ルールを理解しそれを徹底させなければ、エクササイズとして崩壊してしまうこともあり得る。SGEは完全なゲームではない。振り返りを

行い、自分の考えを整理し、他者との意見の交流を行う事が、SGE で最も重要なことである。必ず子どもにルールを理解し遵守させ、その後振り返りを行うことで、エクササイズ
のねらいを促す必要がある。

人間関係とは、単に人との親和的な関係を築くことではない。他者との関わりを通して、
自己の変容、成長を促すものである。自分以外の相手がそこに存在することを意識し、独
りよがりな思いをぶつけるのではなく、常に相手意識を持ち、それに基づき考え行動するこ
とが人間関係をつくる、良好なものにする上で重要である。これが可能となれば、親和性
は自ずと構築される。子どもがこのような人間関係をつくることを、教師は学校現場で促
していく必要がある。

SGE を用い、授業の中で相手の気持ちを考えまた自らの思いを振り返るという時間や場
をあえて設ける。この経験があれば、子どもは自らが人間関係に悩んだ際、躓いた際に、
これを基として、目の前の現状を整理し人間関係に向かっていくことが可能となる。SGE
を学校教育の一環として用いることで、今後の人との関わりに活かすことができる。

6. おわりに

本稿では、人間関係づくりの一手法として SGE を用いた。直接体験が不足している子ど
もたちに対して、他者との関わりの中で人間関係を学ぶ在り方である。授業の中に SGE を
組み込み、計画して行うことで、人間関係がつくられる。ただ、SGE では場面や時間は指
導が可能なように予め設定されている。その為、子どもが思考判断しやすいパターン化さ
れたものが多い。しかし、現実を生きる子どもたちは、常にこのような問題に遭遇する訳
ではない。他者との関係の中では、どうしても割り切れない、思考が停止してしまうよう
な場面に出くわすこともあるだろう。そのような際に対処することのできるような、柔軟
な思考を子どもたちに身に付けさせることが、今後子どもの人間関係を育てる上での更な
る課題の一つであると考える。

引用文献

- 1) 石田裕久 (2005) 「対人関係トレーニング」 瞥見 『人間関係研究 4』 p125-134
- 2) 采女隆一・津村俊充・宮川充司他編 (2008) 『スクールカウンセリングと発達支援』
ナカニシヤ出版 p145-146、p156-160
- 3) 國分康孝 (1992) 『続 構成的グループ・エンカウンター』 誠信書房 p3-13

参考文献

- 1) 岡田弘 (1999) 「構成的グループエンカウンターを活用した授業の学習集団内の人間関係と自己意識への影響に関するパイロットスタディ」『聖徳栄養短期大学紀要 30』p29-35
- 2) 國分康孝編 (1996) 『エンカウンターで学級が変わる 小学校編』図書文化社
- 3) 國分康孝編 (1996) 『エンカウンターで学級が変わる 2 小学校編』図書文化社
- 4) 國分康孝編 (1996) 『エンカウンターで学級が変わる 3 中学校編』図書文化社
- 5) 國分康孝編 (1998) 『育てるカウンセリングが学級を変える 中学校編』図書文化
- 6) 國分康孝 (2006) 『構成的グループ・エンカウンターと教育分析』誠信書房
- 7) 総務庁「第 8 回 世界青年意識調査」
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html>
(2013/1/6 アクセス)
- 8) 津村俊充 (2010) 「グループワークトレーニングーラボラトリー方式の体験学習を用いた人間関係づくり授業実践の試みー」『教育心理学年報 49』p171-179
- 9) 早坂泰次郎 (1991) 『人間関係学序説』川島書店
- 10) 深田博己 (1999) 『コミュニケーション心理学』北大路書房
- 11) 諸富祥彦 (2000) 『エンカウンター こんなときこうする！中学校編』図書文化社